

日本語とフランス語の間で・・・

— je cuid et pense en J/F, donc je suis

中 川 正 弘

「思う」か「考える」か？

フランス語から日本語への翻訳で動詞 « penser » は「思う」と「考える」の二つから選ぶことになる。英語の動詞 « think » と同じなのだが、どちらを使っても大した問題ではないと言う方は少なくない。しかし、それは「自然に／上手に」、つまり何も考えずに言葉が選べる日本人だからだ。日本語を学ぶ外国人にとつてはいつまでも気になる「使い分け」となっている。

彼らは「使い分け」がよく分からないから適当に混ぜて使っているだけなのだが、それを聞いたり読んだりした日本人が「それはおかしい」と指摘することはめつたにない。すると、二つの動詞の意味は同じなのかと考える。ところが、日本語の文章指導では書き直される。ということは、やはり二つは違うようだ。しかし、どちらを使っても日本人が間違いだとは言わない。そこで

- ① 「思う」だけを使う。
- ② 「考える」だけを使う。
- ③ よく分からないが「思う」と「考える」をいいかげんに混ぜて使う。

この三つから自分の方針を選ぶしかない。

日本語の作文、文章の指導をする教師は当然この使い分けについて質問されることが多いのだが、だれもが間違いなく簡単に選べる選択基準はなかなか示せない。教師が使い分けについて説明しない、できないというわけではない。教師に限らず、普通の日本人でも二つの違いはよく分かっているのだから、確信をもってキツパリと説明する。

A・・・「こころ」でするのが「思う」、「頭」でするのが「考える」。

B…さまざまな材料を複雑に組み合わせる「考える」と違い、「思う」はシンプルで「感じる」に近い。

日本人にとってはこのような説明でじゅうぶんと感じられる。しかし、すでに「自然な使い分け」ができているからそう言えるのであって、「まだ意味の違いが分からない」と考えている外国人にとって間違いなく選ぶための有効な定義とはなっていない。Aについては、「こころ」と「頭」は何を基準にどうやって切り替えるのか。日本語を使うとき、自分は「頭」しか使っていない、すると、「考える」しか使えないということになる。Bについては、「複雑」と「シンプル」の境界はどのあたりにあるのか。「多い／少ない」が主観的にしか選べないのと同様に、概念としては二者択一となつていても、現実のさまざまな状況では容易に判定できない、というよりほとんどいつも判定に「迷う」ことになりそうだ。日本人にはこのような判断がすぐできると言うのか。

シンプル

複雑



ネイティブの自然な選択に「後付け」される説明は「有効な選択基準」を求める外国人にとって「選択のすり替え」「選択のたらい回し」になりやすい。

フランス語、英語で一つの言葉で認識されている行為・行動

日本語とフランス語の間で…

が日本語で二語になることについて考えてきたが、「分節」することが不可能ということを確認してみると、何か別の手を考えるしかない。ここまで「*penser*」「*think*」「*思う*」「*考える*」という言葉の意味、定義を考えてきたが、ここで視点を変え、人間のリアルな「思考」がどのようなものかを確認しておこう。間違いなく「考えている」と言える時間を想起していただきたい。その時、私たちの脳内で行われている活動は「複数、あるいは多数の概念、イメージの想起」「比較・対照」「肯定／否定」などからなる。確かに「複雑」であり、これに「行きつ戻りつ」「強調」「スピードアップ／スローダウン」が加わるのだから、ひじょうにアクティブだ。

第三者として見る「考える人」のイメージは静的なものだが、今考えてもらいたいのはそんなものではなく、自分が現実時間軸上で遂行するプロセスだ。「考える」は一瞬の中に孤立しているわけではない。その時間は六〇分、一〇分、一分、三〇秒、……といろいろだろうが、その行為・行動には「始まり」がある。

いつどのように考え始めたか正確には想起できないかもしれないが、「考える前の時間」、あるいは「考えていなかかった時間」から「考え始めてからの時間」に切り替わった時のことは記憶に残りやすいのではないだろうか。先に並べた複雑な行為の組み合わせがその始まりの瞬間からずっと同じ調子で展開することとはまずない。

日本語は「……は」と何か言葉を一つ思い浮かべ、それからそれについて考えることが多いのだが、その言葉、主題は明確

な意志をもって主体的、主導的に選ぶのではなく「到来する」と感じられるものが多い。言葉をこのように受動的に迎え入れ、それに対して「好き／嫌い」「いい／悪い」など、ごく単純な評価を下しているだけのことがよくある。わたしたち日本語を母語とする者の意識は受動的でシンプルな「言葉の到来」から始まり、徐々に、あるいは急速に複雑でアクティブなものに変わって行く。「言葉の到来」で始まった後、さまざまに試みられる「考える方法」を日本語では「思索・思索・思惟・思弁……」など「思+α」で表す。これらは「思考」と区別し、特殊な意味合いを込めて使われていると感じるかもしれないが、二つ目の漢字で表そうとするものはどれも「シンプルで受動的」ではない、つまり「複雑でアクティブ」だから付加されている。これら特殊な「方法」を「思考」は一般概念として包括する。念のためこのプロセスの終わりも確認しておこう。「考える」という言葉の典型的イメージ通りの「アクティブ」で「複雑」な時間の後、このプロセスは収束を迎える。アクティブだった「思考・考察」が、一時的なものであれひとつの判断にまとめられ、行為・行動としては停止する。「序論+本論+結論」あるいは「テーズ+アンチテーズ+サンテーズ」という論文に求められる展開はこのような「静」から「動」へ、そして「静」に返る「思考」の自然なプロセスを映している。

思考の「始まり」と「終わり」

このように考えると、わたしたちはフランス語が *« penser »*

一語で捉えているものを日本語が「思う／考える」の二語で捉えていることを見直す新たな視点が得られる。しかし、「思考」のプロセスを時間軸上に展開する「線状のもの」として見ると言っても、それを前半と後半の二つに分けようと言うわけではない。どのくらいの密度まで「シンプル」で、どのくらいの密度から「複雑」とは言えないように、一つのプロセスを前半と後半に分けるための基準を立てることは不可能だ。

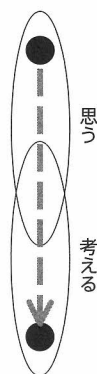
ここで考慮に入れなければならないのは二分割の仕方、つまり「思う」「考える」の選び方が、ひとりひとりの日本人にとつてはハッキリしている一方で、どちらにしようか迷ったり、どちらでも構わないと感じたりする場合があるという事実だ。この「思考プロセス」は、始めと終わりが区別されているだけで、その途中、中程あたりでは二つの動詞の選択基準がかなり緩くなり、他の人の話や文章であれば、自分と違う選び方をしているもそれはそれで自然だと感じる。

一つの行動と捉えられる「思考」は一本の線のイメージになりやすいが、線はそもそも点Aと点Bの異なる二点によって定義されるだけで「中間地点」などないのだから、「中程」に実体などなく、それは「平均」のように人間だけに見える記号的幻想なのだろう。

選択基準がハッキリしていながら、どちらでもいいと判断できるといえるのは一見「矛盾」している。しかし、これらが両立する定義の立て方がないわけではない。

プロセスの始まりを含むが、終わりは含まない↓「思ひ」

プロセスの終わりを含むが、始まりは含まない↓「考える」



このように考えれば、

- ① 「思う」でなければいけない場合
- ② 「考える」でなければいけない場合
- ③ 「思う／考える」のどちらでも構わない場合

の三つの可能性が矛盾なく区別できる。ここまで何度でも使ってきたが、「思考」という漢語表現はこの言葉が表すプロセスの両端、あるいは二極の関係をうまく表している。

中世の「*penser*」と現代の「*penser*」

日本語についてはこれで納得できそうだが、フランス語、英語ではこのような「思考プロセス」をどう認識し、どう扱っているのか考えてみたくなる。デカルトの「*Je pense, donc je suis.*」の日本語訳はかつて標準だった「我思う、故に我有り」から「我考える、故に我有り」を標準と考えるように変わったが、それにより「*penser*」の解釈が「シンプルで受動的」から「複雑でアクティブ」に変わったと感じる。しかし、この「二者択一」と見える解釈の変更に問題はないのだろうか。

ここで考慮するに値するフランス語の歴史的变化がある。中世フランス語の散文作品、例えば『アーサー王の死』の現代フランス語訳 *La Mort du roi Arthur* ⁽¹⁾ には動詞「*penser*」がかなり出てくる(二四一ページ中一一四回)。しかし、中世フランス語のテクスト *La Mort Le Roi Artu* ⁽²⁾ では「*penser*」がどれくらい使われているか見てみると、二六九ページ中七六回しか出てこない。現代フランス語への翻訳で翻訳者が二倍近く増やしたのかというとそうではない。

実は現代フランス語では「*penser*」と訳される中世フランス語の動詞はもう一つ「*cuidier*」があり、こちらは二六九ページ中九七回使われている。現代フランス語訳が一一四回、中世フランス語版が七六・九七・一一三回と数字が合わないのは、現代フランス語訳では「*à mon(ton) avis*」など同義的、類義的な表現がかなり使われるためだ。

使用例：出典三段目

【中世】 Or vos demand ge, fet li rois, quanx chevaliers vos *cuidiez* avoir ocis de vostre mein en ceste queste.

【現代】 - Je vous demande donc, dit le roi, combien de chevaliers, à votre avis, vous avez tués de votre propre main pendant cette quête." (それでは訊ねよう、と王は言う、この探索において、あなたは自分の手で何人の騎士を殺めたと思っつ)

【中世】 Et messires Gauvains *pense* un petit et li rois li dit autrefoiz : « Par mon chief, ge le vueill savoir, por ce que aucun vont disant que vos en avez tant ocis que c'est merveille.

【現代】Messire Gauvain s'étant pris à réfléchir quelque peu, le roi lui dit à nouveau : — “Je vous le jure, je veux le savoir, car d'aucuns répandent le bruit que vous en avez tué un nombre incroyable. (するとゴウヴァン卿はしばしば考へこんだので王はまた言った―「余はどうかしても、それを知りたいのだ、なぜならみなのは者は、そなたがじつに驚くばかり大勢の騎士を殺めたと申しておるからじや」)

単純に言つて、中世フランス語で「思う／考える」という意味で標準と見えるほど使われる動詞は「cuidier」だった。それが現代では「outrecuider」(自信過剰の／／ぬげれの強い／横柄な)の／／のような表現に痕跡を残すだけであつた。使われなくなる。フランス語の歴史におけるこの動詞の消失を中世フランス語研究者Christiane Marchello-Niziaは「主観性」の色が濃かつたフランス語が「客観性」を基調とするように変化したことを示す一例だと指摘している。

そう言われると、そうかなと思ひもするが、よく考えてみれば、中世フランス語で「je cuid」が「主観性」を強く表していたとして、それが近代には使わなくなり、代わりに「je pense」を使うようになったことで「客観性」が表現されるようになったと果たして言えるだろうか。これらはどちらを使おうが「主観」の表現と見なされるはずだ。

それでは「cuidier」と「penser」が共存していた中世フランス語ではどのような使い分けがされていたのだろうか。辞書で「penser」の語義の説明には「concevoir, imaginer, évaluer, apprécier, réfléchir, méditer, croire, estimer, juger, …」など、特殊な意味合い

を表現するものがずらりと並び、「penser」が一般性のひじょうに高い動詞であると分かるのだが「cuidier」のほうは「penser, imaginer, se soucier de, prétendre, …」ぐらいしかない。区別するような定義、使い分けの基準を求めても、トップに「penser」とあるのだから、二つの語義はほぼ重なると思ひ見えな

現代フランス語が「penser」だけで済ませているところを使い分けのハッキリしない二つの動詞を組み合わせて使う、これは最初に話題とした日本語の「思う／考える」と同じ状況だ。

そこで、言及した『アーサー王の死 (La Mort Le Roi Artu)』では「cuidier」がどのように日本語に訳されているかを見てみると、だいたい「思う」と訳されている。数え間違ひがあるかもしれないが、「思う・三二八回」に対して、「考える・九四回」となっている。これだけで見れば、中世フランス語の「cuidier」/「penser」から「cuidier」が選ばれるより、日本語の「思う／考える」から「思う」が選ばれることが多いと考えてよさそうだし、日本人はそれで自然だと直感的に感じる。

日本語訳は「cuidier」≡「思う」と完全に対応させているわけではないが、原文における「cuidier」の出現箇所を見ると、日本語で「考える」ではなく「思う」が選ばれて当然と思ひえるほど、「シンプルで受動的」な内容を従えている。また量を表す副詞「un petit (すこし)」≡「un peu (たかきく)」と組み合わせられ「よく考えた／考えに考えた」↓複雑でアクティブ」となるのは「penser」だけのようだ。

これだけの材料では「論証」となりえないが、根拠ある「仮説」ぐらいには見てもらえるのではないだろうか

思う…思考プロセスの始まりを含むが、終わりは含まない。
考える…思考プロセスの終わりを含むが、始まりは含まない。

と定義したが、それと同じことが、「cudier」と「penser」についても言えそうだ。

「つながりのプロセス」ではあるが、「始まり…シンプルで受動的／終わり…複雑でアクティブ」という正反対の様相を見せる行為・行動となっているのは「思考」ぐらいだが、このようなプロセスをただ一つの動詞「penser」で表すようになった現代フランス語はプロセスの両端を見なくなったのだろうか。

ここで、フランス語と同じように「思考」を一つの動詞「think」だけで表す英語に興味深い用法があることを指摘しておこう。

英語の「think」には「I think / I thought」のように主格で人称が出る構文だけでなく、「me thinks / me thought」のように「思考」の主体であるはずの人間が与格で組み合わされる「非人称構文」がある。シェークスピアの作品には一五〇以上の用例があるそうだが、そのような古い用法の文化的記憶、遊技的引用なのかもしれないが、現代英語でも使われなくはないらしい。

「あなたのお気に召すなら」と訳せるフランス語の「si vous plaît」は「vous（あなた）」を与格で使う「非人称構文」だが、これを英語が移植した「if you please」の動詞「please」は現代では「you」を主格とする人称構文と考えられているようだ。これをちやうど裏返したかのように、フランス語では人間が主格の人称構文しか使わない「penser」と同義としか見えない「think」

を英語では人間が与格の非人称構文でも使うのだから驚きだ。

「I think」と人間を主格で使えば「アクティブ（↓内容が複雑になりやすい）」になり、「(it) me thinks」と人間を与格で使えば、「受動的（↓内容がシンプルになりやすい）」になるだろうから、文法の論理を効果的に使ったレトリックなのかもしれない。

この例を見れば、英語は「思考プロセス」を一語で表してはいても、プロセスの両端、始まりの「受動相」と終わりの「アクティブ相」をちゃんと認識していたようだし、現代でもその認識が残っているのだろう。

さて、そこで現代フランス語だが、英語の「me thinks」と構文が同じになる「Il me pense*」は使われていない。同義的言い換えに使える「Il me semble*」、「Il m'apparaît*」などがあればそんな表現など必要ないからだろうか。

このように中世フランス語と現代フランス語、日本語を比べてみて気がついた問題がある。「思考プロセス」を一つの動詞で認識しているフランス語話者、英語話者、また多くの日本語を学ぶ外国人から、二つの動詞の選び方について説明を求められることがあるため、このような考察を試みたのだが、日本語話者、中世フランス語話者にとって二つの動詞の使い分けは明快で何の疑問も感じないことについてはもうすこし考えてみたほうがよさそうだ。

あちらからこちらを見て訝しく思うような場合、逆にこちらからあちらを見て同様に訝しく思っておかしくない。しかし、二つの動詞の組み合わせで「思考プロセス」を認識する日本人が一つの動詞しか使わないフランス語、英語を見ておかしいと

言ったりはしていない。二つから選んだりしないでいいのだから、やはり簡単と感じる。しかし、それでほんとうに事態を正しく見ているとは限らない。このような場合、錯覚があるにもかかわらずそれがなかなか露呈しないだけのことがよくある。

ありえない話だが、「*cuidier*」と「*penser*」を組み合わせて使っている中世フランス語話者は現代フランス語の「*penser*」の意味をどう受け取るだろうか。中世フランス語の「*penser*」の意味領域でしか受け取らないだろう。そして、もし中世フランス語話者用の「現代フランス語辞書」があれば、「*penser*」の語義としては「*penser*」だけでなく「*cuidier*」も書き込まれるはずだ。綴り方にまつた変化がなくとも「*penser*」の語義は中世と現代で同じではない。

同じことが日本人にも起こるのではないだろうか。日本人は「*penser*」の意味領域を「思考プロセス」全体としては認識しにくく、「始まりを含むが、終わりは含まない／終わりを含むが、始まりは含まない」のどちらかと認識するだろう。コミュニケーションの受信者がこのような受け取り方をしている、それが発信者に分かることはおそらくない。現実のコミュニケーションでは誤差の許容範囲に納まるだろうし、第三者の目にも、また当事者同士にも一〇〇％理解されているように見える。デカルトの「*je pense, donc je suis*」の日本語翻訳については既に触れたが、「我思」にして、「我考える」にして、翻訳者は二つの動詞のどちらがより適切か選ぶ際、迷ったに違いない。その迷いは自身が日常二つを使い分ける時には経験するはずのないものだ。そして、選んだものが「より適切だ」と総合的に

判断してはいても、何か欠けてしまうと感じたことだろう。どちらを選んでも何か欠けてしまう、しかし、一つを選ばなければならぬのだから、どちらがより適切か徹底的に考える。翻訳でそのように苦労された方々にこのようなことは言いにくいのだが、フランス語から日本語への翻訳でどうしても一語対一語にしなければならぬ理由はない。このようなキーワードでなければ、おそらくそれほど拘りはしないだろう。

日本語翻訳者が美意識を持ち、文体にエネルギーを注ぐのは望ましいことだが、その翻訳を読む読者が原典の内容の理解と翻訳文の鑑賞のどちらを大事と考えるか。普通は原典の内容ではないだろうか。読者は翻訳者が内容の正確な理解より文体として表現する美意識を優先しているとは思っていない。まず内容を完全におさえた上で文を練っている。また翻訳の文章の美点は翻訳者のものというより原典に由来すると考えるだろうし、読んで理解困難な翻訳があれば、原典がそんな書き方になっているに違いないと考え、翻訳者を批判することはあまりない。自身の知力が及ばないためだと、理解困難を引き起こした「誤訳」の責任を自分で被る読者も少なくない。

デカルトの「*je pense, donc je suis*」の旧来の日本語翻訳「我思う」は、自身のラテン語翻訳では「*cogito, ergo sum*」と、動詞「*cogitare*」が使われている。しかし、中世フランス語の語源、語義としてこれが繋がるのは「*penser*」ではなく、「*cuidier*」のほうだ（Wiktionnaire）。「*penser*」の語源、語義は「*pensare*」だ。それを考えれば、日本語の訳語としてまず「思う」のほうを選ばれたことは「より適切」だった。しかし、これを「考える」

に替えるべきだと判断した翻訳者は、「思う」では欠けてしま
うものがあり、それは重大な歪みになると考えたのではないだ
ろうか。

しかし、ここで考えてきたように、「考える」を選んでもや
はり欠落を含んでしまう。ではどうすればいいか。翻訳文の文
体への過度の拘りを捨てる。「思考プロセス」の「始まり」も
「終わり」も含めなければならぬのなら、「わたしは思い、考
える」のように動詞を二つとも使えばいい。これでデカルトの
«je pense»は「受動的でシンプル」な認識から「アクティブで
複雑」な認識まで覆うことが日本語で示せるのだが、……。

「思考」の様態——人はどのように「あり」、「いる」のか？

ところで、わたしたちが自身の存在を認識する「瞬間」は現
象として考えてきた「思考プロセス」の先端のはずだが、この
「存在」はそう簡単に人間全体には一般化できないのではない
だろうか。デカルトは「我々は」でも「人は」でもなく、一人称
の「私は」と言った。しかし、「je suis」に使われた動詞«être»
はどの人称で使おうとその語義は同じと考えられる。つまり、
動詞の人称変化システムを通じてデカルトの考えた「存在」は
すべての人称に当てはまることになり、人間は誰でも同じと一
般化されてしまう。

けれども、「je suis」が「我有り」と翻訳されているのを読む
と、日本人は「アクティブに複雑に」考え始める可能性がある。
この文語訳はさらに「わたしはいる」という口語に変換するこ

とで理解、納得しようとするのだが、この動詞の交替はどうし
て必要なのか、疑問を感じておかしくない。

この「ある／いる」については、外国人の日本語学習者も、
「思う／考える」の使い分けの場合と同様、訝しく思っているこ
ろだ。彼らは初級日本語のごく初期に「animal / non-animal」
という選択基準を教えられ、短期間ではば間違いないと選べるよ
うにはなる。ただし、どちらも英語の存在動詞«be»の意味と
しか考えていない。そして、そのように単純な定義では説明で
きない用例を上級レベルに進んでから知ることになるのだが、
「そのような用法がある」という現実を示す以上の解説は普通
行わないからだ。

「文法」は矛盾するものまですべての用法を含む複雑で豊か
なものと捉える方は少なくないが、「語の選択ルール」につい
ては古いものと現代のものが現実の世界に共存しているからそ
う見えるだけだ。「標準」は、国家レベル、地方レベル、地域
レベル、……個人レベルのものが共存するのだから、どのスタ
イルを選ぶかは簡単ではないが、それぞれが使う選択ルールは
ごく単純なものだ。そうでなければ使えない。

「あの人はふたり子どもがある」「ある村に男があつた」のよ
うな使い方は現代日本語の規範文法では違反していることにな
り、現在は「子どもがいる」「ある村に男がいた」のほうが標
準と見られる。デカルトの「我有り」も同様で、現代の標準的
な日本語では「わたしはいる」になる。

新しい用法と古い用法が共存し、文体として選択されること
は日本語に限らず、どんな言語でもあるはずだが、前の王朝の

名残となりそうなものを徹底的に消し去ったり、既存のシステムを革命によって徹底的に排除するようなことをせず、神道、仏教、儒教、キリスト教……なんでも共存させる日本らしく、歴史上一度存在したものは存在を保証される。そして、*« être »* の翻訳に使える動詞には更にもう一つ「*おる* (謙譲→一人称性)」のあることを思い出す。

フランス語や英語のように「存在」を表す動詞が一つの言語からは三つ使う日本語はおかしいと見えるだろうが、逆に三つ使うほうからは一つしかないことが驚きと思えておかしくない。「存在」、特に「人間の存在」は知覚される現象として一様ではないからだ。一人称／二人称／三人称はそれぞれ様態がまったく異なる。

わたしが今ここで「あなた」と呼びかけることができる人は、姿、表情が見え、動けば目で追うのだが、何を考えているのかその心は分からず、ただ推量し続ける。しかし、そんなあなたを見ているわたしは、自分の表情、姿が見えないのだが、心は分かる、というより、心そのものとなっている。また、対象化できる「自分」は「過去」か「未来」のイメージではない。「今」のわたしは「主体」であり、同時に「対象」とはならない。そして、典型的な三人称の対象、ここではないほかの場所にいる「子」「家族」「友」などはここにはいない。わたしの瞼、心に浮かぶそのイメージは動かない。animalsなのだが、non-animalの「物」のように。

これだけ様態が違えば、それぞれ区別できる言葉があるほうが自然なのではないだろうか。不定詞 *« être »* は現象的ではま

ったくなく、これら特殊な様態を第三者の目で一般化することによってしか生まれない認識の様式だ。

デカルトがフランス語で書いた *« je pense »* はラテン語で語源として対応する *« penso »* ではなく、対応していない *« cogito »* と翻訳されているが、この動詞が「より適切」と判断されたのだろう。

「翻訳」は原文の内容をできるだけそのまま別の言語で表すものと考えれば、この場合、語義がずれているのだから、適切な翻訳とは見えない。しかし、このラテン語訳はフランス語を理解しない人のために表わされるのではなく、フランス語もラテン語も解する読者に二つ並べて示すためのものではないだろうか。語義のずれと見えるものはこの稿で言及したラテン語 *« cogitare »* を語源とする動詞 *« cuidoier »* のフランス語からの消失、その語義の *« penetrer »* への吸収・統合によって生じる誤解を補正する意図が感じられる。

「思考プロセス」の最初の瞬間にある「シンプルで受動的」な認識が *« cuidoier »* とともにフランス語から消えたわけではないことは、*« Comment trouvez-vous ce tableau ? (この絵をどう思いますか) »* と *« Qu'est-ce que vous pensez de ce tableau ? (この絵をどう思いますか) »* とが同義的に使われることが示している。「*penser*」を使う後者はさまざまに思考を巡らした結果である複雑なコメントを求める場合に適しているはずだが、前者の「瞬間性」を表現する *« trouver (見つける／発見する) »* を使い、構文も「目的語＋目的格補語」のように一語か二語のシンプルな感覚的評価を求める表現の言い換えに使われる。ということとは、*« penser »*

が「複雑でアクティブ」な思考だけでなく、「シンプルで受動的」な思考までカバーしていることを示す。

日本人は「考える」より「思う」を標準のように多用するが、英語「How do you feel?」の翻訳のような「どう感じる?」、またこれに意味合いの近い「……の第一印象は?」とよく質問し、複雑な思考に入る前の「受動的でシンプル」な感想を大事にする。感覚的評価は「主観的」と言わざるを得ないが、「思考によって主観が形成される前のありのままの自然な意識の状態」を示す。すると、「動物的で偽りが無い」↓即物的 ↓客観的」と見なせなくもない。客観が事実というより目標としてあるのに対し、主観が存在すること自体は間違いなく客観的事実だ。日本人の「我／わたし」は「一時の気の迷い」で間違いを犯し、確かではないもの、移ろいゆくものに執着しやすく、そんなあり方をいつも思い悩んでいる。

注

- (一) *La Mort du roi Arthur*, traduit en français moderne par Monique Samucci, Honore Champion, 1991, p.26.
- (二) *La Mort Le Roi Artu*, édité par Jean Frappier, M.J. Minard, 1964, p.3.
- (三) *Language Evolution and Semantic Representations - A Case Study of the Evolution from "Subjectivity" to "Objectivity"* in French, In: Fuchs, Catherine and Stéphane Robert (eds.), *Language Diversity and Cognitive Representations*, LILACAN-CNRS, 1999.
- (四) 天沢退二郎『アーサー王の死』、「フランス中世文学集」第4巻〈奇蹟と愛と〉(白水社、一九九六年、一〇頁)。